

「中高生のための『岡山の美術』入門」ができました。

子どもから大人まで楽しめるハンディな美術の本です。
弥生時代の土器から現代アートまで、約60点を掲載。
岡山の美術の歴史と特色を分かりやすく説明しています。

- 中高生のための「岡山の美術」入門 新書版 CD-ROM付
- 編集・発行：岡山県立美術館
- 県内の中学、高校、大学や図書館には無料配布
- 当館にて500円で販売中



「社会人のための『美術のタベ』」が始まりました。

「平日は仕事、土日は家の用事でなかなか美術館に行けない…」
そんな方にぴったりのプログラムが始まりました。
毎月第4金曜日の夕方、当館学芸員が展示室で開催中の企画展や
岡山の美術について、作品を前に分かりやすく解説します。

6月～8月の実施予定

- **6月23日(金) 入門・岡山の美術②**
岡山ゆかりの洋画作品について解説します。
- **7月28日(金) 高橋秋華をみる**
清雅な山水・花鳥画を得意とした秋華の画業を紹介します。
- **8月25日(金) 入門・岡山の美術③**
岡山ゆかりの洋画作品について解説します。

いずれも常設展の観覧料が必要です。
午後6時～午後7時
開始5分前に正面入口受付へお集まりください。
事前申込み不要



お気軽に
ご参加ください♪

夜間開館のお知らせ

7月21日～8月18日の毎週金曜日は、夜間開館日です。
開館時間：午前9時～午後7時(入館は午後6時30分)
実施日：7月21日、28日、8月4日、11日、18日(いずれも金曜日)



これからの展覧会

特別展 **Mite!**おかやま 7月21日(金) ▶ 8月20日(日)

鑑賞は、こんなにも楽しく、驚きに満ちている！

世界各国で鑑賞教育の第一線で活躍しているアメリカ・アレナスが、豊富な経験をもとに展覧会をプロデュース。彼女が提案する鑑賞を通して「自分の思いを再確認」し、「さらに掘り下げて考え」、「人との会話が生まれ」てきます。時代やジャンルを超えた作品と向き合った時、どんな体験が生まれるでしょうか？ 会場では、鑑賞のお手伝いをするナビゲートスタッフが、鑑賞のお手伝いをします。

7月21日(金) 9:40～ 開会式とアメリカ・アレナスによるフロアー・レクチャー
7月22日(土) 13:30～ アメリカ・アレナスによるギャラリートーク
7月29日(土) 14:00～ 美術館講座
「アートで話そう～実践!対話型ギャラリートーク～」
講師：林 寿美(川村記念美術館学芸員)
7月23日(日)～8月20日(日) 鑑賞ナビゲートスタッフによる鑑賞体験ツアー
(11:00～と14:00～の2回/地下1階展示室にて)
※申し込み不要、当日、会場で受け付けます。

常設展特別陳列 「日本画家 高橋秋華」7月19日(水) ▶ 8月20日(日)

岡山市西大寺出身の日本画家、高橋秋華(1877-1953)は、京都の山元春挙に学び文展等で活躍、また皇族をはじめ数々の有力者より揮毫依頼を受けた人気作家でした。 55歳の頃に京都から宝塚へ居を移し、戦後帰岡して77歳で亡くなるまでの7年間は岡場で制作しました。

今回の特別陳列では、師 春挙ゆずりの山水画や私淑した岡本秋暉の影響を感じさせる色鮮やかな花鳥画、自作の詩に画を配した文人画風の趣き豊かな作品など、個人蔵の初公開作品を中心に30点あまりを展示いたします。代表的な作品として、一等巡洋艦「摩耶」の艦長室に懸けられた「摩耶夫人の尊像」に想を得た「摩耶夫人図」、「外金剛・内金剛屏風」、余慶寺恵亮院の「竹に虎図」などがあります。あわせて彼の愛した文房具や印72顆等の遺品も紹介し、秋華の魅力の再発見の場としたいと思います。



高橋秋華 『牡丹園』

ワークショップ

- 6月10日(土)・11日(日) 美術ってなーに？ 美術館を知る「美術館探検」
美術ってなーに？ 美術を知る「スクラップ&ドリーム」
特別展 **Mite!**おかやま 鑑賞ツアー (11:00～ と 14:00～)
県美鑑賞ナビゲーター研修 (10:00～15:30)
県立大学短期大学部生によるワークショップ (内容未定)
- 7月23日(日)～8月20日(日) 特別展 **Mite!**おかやま 鑑賞ツアー (11:00～ と 14:00～)
7月25日(火)・26日(水) 県美鑑賞ナビゲーター研修 (10:00～15:30)
8月 1日(火) 県立大学短期大学部生によるワークショップ (内容未定)
- 8月 2日(水)～6日(日) **Mite!**おかやま 鑑賞教室 (2日・3日は、岡山市内小学校児童生徒鑑賞教室として実施)

※ 詳細な内容については、1ヶ月前を目途にチラシ等でお知らせする予定です。美術館までお問い合わせください。

美術館講座

- 6月17日(土) 「藤城清治と影絵」 鍵岡正謹(館長)
- 7月 1日(土) 「原田直次郎と父一道」 渡辺道夫(副館長)
- 7月29日(土) 「アートで話そう～実践!対話型ギャラリートーク～」
林寿美(川村記念美術館学芸員)
- 8月 5日(土) 「高橋秋華の画業」 中村麻里子(主任学芸員)
- 9月 9日(土) 「表現と鑑賞」 廣畑浩(学芸課主幹)

- ・いずれも午後2時～午後3時30分
(開場は午後1時30分)
- ・場所 ■…地下1階講義室(定員70名)
□…2階ホール(定員210名)
- ・聴講無料、事前申込み不要、先着順

編集後記

「常と同じ作品が展示されている」そんな語感のある「常設展」ですが、当館では古書画・日本画は毎月、洋画・工芸は3ヶ月ごとに展示替えを行っています。しかしなかなか常設展目当てにお客様は来てくれません。特別展・企画展にだけ注目が集まるというのは日本の美術館における特色のひとつですが、いま私たちは「もっと常設展を知ってもらいたい」という思いにかられています。そのために何をすれば良いのか、まず議題にのぼったのが「常設展」という名前の変更でした。昨年暮れから館内で様々な議論した結果、今年度はひとまず保留ということになりましたが、名称変更の検討も含め今後とも常設展アピールに力を注いでいきたいと考えています。

そのようなわけで、今号から「常設展のここに注目!」コーナーを設けてみました。今後も常設展の魅力に迫ってきたいと思います。(T.Y.)

美術館ニュース 第73号
発行：2006年6月 発行者：岡山県立美術館 〒700-0814 岡山市天神町8-48 TEL：086-225-4800
URL http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/kenbi.htm E-Mail kenbi@pref.okayama.jp

ISSN 0916-9466

100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

平成17年春に開催した特別展「燐葉大展覽会」マッチラベルのシンセカイでは、明治・昭和時代のマッチラベルとともに、現代芸術家37名十当館収蔵作品による新作マッチラベルを展示しました。また、それら40点のラベル原画から仕立てられた特製マッチセツトは、本館ミュージアムショップで販売しています。

そのマッチ箱が、美しい額仕立てとなって当館へやってきたのは、昨年の暮れのこと。京都表装協会青年部主催の装研会へ出品するため、京都

「墨申堂」の山内健也さんが手がけたものです。出品作家の中には、マッチ箱の両面に別の絵柄・文字を配した方が多かったのですが、本点ではその両方を楽しむことができます。背面を覆う紙のやわらかな白さが、マッチそれぞれの個性を引き立てつつも調和してくれ、あえて素朴に仕上げられた杉の表情がマッチの存在感を引き出しています。

（学芸員 山吹知子）

※墨申堂については、「常設展のここに注目」コーナーで紹介しています。

美術館ルネサンスにむかい

岡山県立美術館長 鍵岡 正謹



このたび館長に就任いたしました、鍵岡正謹と申します。すこしばかり堅い姓名でして、姓は鍵を開けるの鍵に岡山の岡でカギオカ、名前の方は誰も読んでくれませんがマサノリと読みます。

岡山の県立美術館は、再来年度の春、即ち平成20年3月にはいよいよ開館20周年を迎えます。20年という美術館そのものの節目をひかえ、来年度には全国生涯学習フェスティバルがあり、そうして平成22年には文化の国体ともいべき国民文化祭がひかえています。

こうした全国規模の文化的事業のなかで、県立の美術館がはたすべき役割は大きいものがあります。そのためにも、過去をふりかえり現状を認識し、今後の方向を少し考えたいと思います。

昨今の全国に吹き荒れている美術館を含めての文化施設に対する厳しい風当たりは、文化施設に経済効率を持ちこみ、その存在を危うくさせています。実のところ、文化こそ国民の存在理由であり、生きる人間の存在そのものであると考えております。経済効率は人間の暮らしをよりよくするための手段でこそあれ目的ではありません。まして文化活動が経済効率で話されることは、文化の根源に対する蛮行であります。人間が人間らしい存在生活を営み、そこから生みだされる文化の活動こそが、人間が生きるうえでの生命の輝きを放つコトであり、ヒトであり、モノであります。過去の人間が産みだして来た文化や芸術は、今日の私たち人間の生活文化の基盤になっていますと同時に、新しく創造される文化芸術の根拠となり、未来のための灯でもあります。

少しばかり抽象的になってまいりましたので、私が通いはじめた美術館の建築から申します。私どもの美術館は地元の万成石を豊富に使った堂々たる石造建築であります。20年が経過したとも思われない清澄なともいべき建築であり、また汚れが少ない内装が保たれていて、実に大切に使用されてきた美術館建築であると思います。そうしてまた、美術館の企画はじめ運営も先輩たちの努力で、岡山に縁ある作家や美術を積極的に展開してきました。収蔵作品は雪舟にはじまり、武蔵や浦上玉堂ら日本水墨画の一群は誇るべき絵画であり、知的物的財産です。ついで明治初期、近代の曙に油画をいち早く取り入れた原田直次郎や松岡寿ら一群の開明的な洋画家たちの作品もあります。岡山に産まれ活

躍した美術家たちや岡山に係わる美術家たちが幅広く充実して収集され、それらが研究調査されています。最近での国吉康雄展などは、郷土が誇りにし全国や海外にも発信すべきコトであります。

これらをもとに今後必要なのは、現在活躍中の郷土に係わる美術家たちを、多種多様に収集し企画し展開していくコトでありヒトであると思われます。先人の遺産も継承発展させ、個性的な芸術を創造していくために観客が美術館という場で共存していくコトが子供たちの未来のために大いなる啓示を与えてヒトを育てると思います。

私の申していることは“温故知新”という古い言葉に当たりましょうし、芭蕉がいう“不易流行”でもあります。あるいはまた“ルネサンス”と云ってもよいかと思えます。古典的な芸術を今日の視点から見直し再生し、そこから得た新鮮な体感を今日の文化芸術に生かし、美術館という場で展開していく、創造的な美術館でありたいと思います。そのためにも美術館で働く人をはじめ、ボランティアや多くの美術館に係わる人たちが共働的であるところから、創造的な美術館が出来るのではないかと考えます。美術館を展覧会に観にゆく場から、一步も二歩も進んで、大いに活用して頂きたい思います。美術館には、感性をみがき、知的であり、なにより創造に満ちたモノ、ヒト、コトがたっぷりあります。

岡山の県立美術館は美術館開館20周年を、美術館ルネサンスと位置づけて、建築のメンテナンスによりハード面での再生を計り、なにより新しい息吹を感じさせる企画や運営を展開していきたい。県の中核である美術館は、その自覚をもって責任を果たすためにも、高い理想をかかげ、夢多い希望の実現のためにも、なによりも県民とともにある美術館でありたい。県民が豊かで楽しい生活を送るための文化的・創造的な場としての美術館であるために、美術館ルネサンスの風をおこし、やがては吉備ルネサンスとなるために、大いなる一步を皆々様と歩きはじめていたいと思っています。

齋藤 武郎

さいとう たけお

主な仕事はホームページの管理、収蔵品のデジタルベース化、こんにちには美術館など、学芸普及に関わる事が担当です。館で見かけたら気軽に声をかけてください。

- ① 岡山県笠岡市
- ② 姉4人・妹1人
- ③ ちりめん山椒
- ④ 笠岡諸島



質問内容

- ① 出身地
- ② 兄弟・姉妹
- ③ 好きな食べ物
- ④ 岡山県内のおすすめスポット

新メンバーを紹介します。

細田 樹里

ほそだ じゅり

美術館での仕事を通じて多くの人・もの・場所との出会いがあり、刺激の日々を送っています。このような環境の中、私はどのような影響を受けていくのでしょうか。楽しみです。よろしくお願いします。

- ① 島根県松江市
- ② 姉1人
- ③ 魚介類
- ④ 児島

常設展のここに注目！

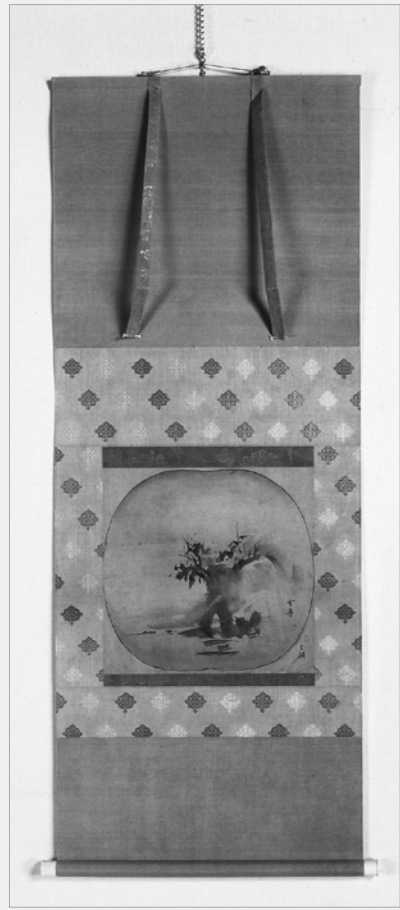
玉潤に雪舟、武蔵、浦上玉堂、森谷南人子、小野竹喬、池田遙邨と、ご紹介したい作品は数々ありますが、いわゆる作品解説からは少し視点を変え、ここでは作品を支える現場に注目してみたいと思います。

日本美術には、巻物や掛け軸、面帖や屏風、襖など、中国から伝来し発展を遂げた独自の形態があり、それらを紙や布をつかって作り上げる、表具と呼ばれる伝統技術があります。「作品に着物を着せるようなもの」表具のことをそう説明してくださったのは、京表具「墨申堂」の山内啓左さんです。山内さんは、京都・岡黒光堂で先代の故岡岩太郎氏のもと12年間修業。その後独立し、昭和42年に墨申堂を設立されました。その高い技術をもって、国宝や重要文化財の修復をこれまで数多く手がけられています。

今は第一線をご長男の健也さんに委ねられ、自らは人を育てることに徹しているように見える山内さん。自宅兼工房の墨申堂では、数年前まで社員は住み込みで暮らしていました。今でもお昼の食事は奥様が用意され、社員の方みなさんともにとられています。「師弟関係を結ぶということは親子になるということです。」人を育て、技を伝えることを自らに課すその言葉は、厳しさと温かさに満ちています。（煩わしさを感じることはないのだろうか...）そんな思いを抱いた私に「大勢の中で暮らすということに関しては終生変わらないでしょ」と語ってくださいました。

山内さん曰く「『従』に徹する」仕事、表具。卓越した技術と洗練された美意識、そして上質な材料をもって、作品を引き立て支えます。自らが前に出ることは決してありません。奥深い伝統美を湛えながら、あくまでさりげない。それは墨申堂の佇まいそのもののように思えました。当館でも山内さんの手によって新たな息吹を得た作品に出会えます。雪舟等楊筆『山水図（倣玉潤）』、牧谿筆『老子図』、宮本武蔵筆『周茂叔図』等。他にも、常設展で品格あふれる表具に出会ったら、それはきっと山内さんのお仕事です。技の伝承が織り成す舞台裏に思いを馳せながら、それらの作品を眺めてみるのも、楽しみ方のひとつかも知れません。

（学芸員 山吹知子）



重要文化財
雪舟等楊筆『山水図（倣玉潤）』
（6月25日まで展示中）

展覧会後記

2ヵ月近くのを会期をもって開催した「国吉康雄展」が閉幕した。

この展覧会の趣旨、そしてこの展覧会を機に国吉の作品について考えた事柄については図録に執筆したので、ここでは繰り返さない。開会後の主要な関心事は、見に来て下さった方々の反応であった。身が引き締まるような思いでお迎えした来館者は、言うまでもなくご所蔵家である。ほとんどすべてのご所蔵家が、遠路はるばる、あるいは会期中に何度も当館に来館され、長い間展示室で時を過ごされていた。国吉の作品に対するご所蔵家の愛情が、改めてひしひしと伝わってきた。

国吉の作品は、見る者が「見たい」と思うことによって、初めて門戸が開かれる作品であろう。作品に込められた作家の感情を受け止める、あるいは作品の魅力の源に辿り着くべく、作品が織りなす襲の奥深くにまで観る側が分け入ることによって、その良さをますます味わうことができる性質の芸術である。唐突な比較かもしれないが、クラシック音楽であれば、シューマン、フォーレ、ヤナーチェクあたりが思い浮かぶ。複雑な感情表現に富み、否応なく当時の時代背景に思いが及ぶ晩年の作品は、ショスタコーヴィチのようでもある。いずれも一部の人々に強く支持されている作曲家ではあるが、「陰鬱」「晦渋」「辛くなる」「ついていけない」といった理由で敬遠する人もいる。国吉を見る人の反応も同様、というのが私の得た感触である。まずは万人に好かれるチャイコフスキーやショパンではないのだ。

問題は、見たい人が見て楽しめばよいという姿勢に、少なくとも当館は安住できないということである。公的な存在であり、公的資金を使って運営されている当館は、万人に理解される活動を行わなければならない、という反論しえないテーマと向き合う必要がある。「最良の保存は展示をしないこと」とは、よく指摘される美術館をめぐる逆説であるが、「個人の嗜好に左右されがちな芸術を万人に知らしめること」というのも、美術館が抱えるもうひとつの逆説であり、同じほどに根が深い問題なのではないか。

今日の多くの美術館が従来以上に力点を置くようになった教育普及活動は、まさにこの逆説と向き合うことだと言えよう。当館においても、この展覧会では、中学校美術科の鑑賞授業に国吉康雄の作品を取り上げることが想定した指導案を、熱意あふれる「国吉康雄教材開発研究会」の先生方に制作していただき、各中学校の担当教諭に配布するという、一歩踏み込んだ活動を行った。

国吉の作品の性質を考えると、教育普及活動を行った場合でも、すべての生徒に受け入れられるものではないような気もしている。それでもとりわけ若い世代にアプローチするのは、それが未来に対する投資だからである。芸術作品の場合、たとえ最初に接したときにその魅力を十分に味わうには至らない場合でも、すばらしい作品であれば、何がしか漠然とした印象を見た人の心のなかに残すことがあり得る。若い世代に対して、国吉康雄の作品に親しんでもらう機会を設けるのも、ここで何らかの形で国吉のことを心に留めてもらい、後年改めて思い返すようなことがあったときに、いくらかりとも芸術に親むきっかけになればよいと考えて行っている。いわば種まきのような仕事で、芸術を観る眼が後年芽吹くようにとの願いをもって、子どもたちに仕込むのである。国吉をめぐる鑑賞教育ブ

ロジェクトは展覧会終了後も継続し、今年度は小学生向けの鑑賞授業のあり方を検討することになった。どうぞご期待ください。

もちろん、福武コレクションをはじめとした国吉に関する調査研究ならびに展示活動は、これからも行っていく。国吉康雄は当館の看板作家である。日頃の常設展でいかに魅力的に国吉を紹介していくか。そして将来的には国吉康雄に関連した特別展を、今度どのような形で企画するか。これが二大課題である。今回のような大展覧会はそう頻繁には開けないが、規模は小さくとも鋭い視点から国吉の画業に焦点をあてる企画展ならば、いくらでも可能であろう。

今回の展覧会は国内コレクションを紹介する展覧会であったが、それでも図録原稿執筆のための調査として米国に出張することができた。ウィチタ（カンザス州）やデモイン（アイオワ州）といった必ずしも日本からアクセスの良くない都市にまで足を伸ばして国吉の代表作を観覧し、現地のキュレーターたちと知己になることができたのは、ささやかではあるが、今後のことを考えると大切な一歩であった。このような地道な作業を経て、将来的には海外集荷も視野に入れた、国吉康雄をめぐるアメリカ美術に関する自主企画展を開催したいと思う。それは今の私には、未だ遥かに望む高き峰であるが、

展覧会図録への論文和訳掲載を快諾されたゲイル・レヴィン先生を、会期前半にお迎えし、記念講演会を開催することができたのも幸いであった。先生の訪日受入にあたっては、岡山大学に大変お世話になったのだが、先生は講演会以外の日に頻繁に当館に足を運ばれ、事務所の雰囲気も随分と華やいだ印象になったものである。先生のあくなき知的好奇心、バイタリティ溢れる行動力、そして勘の鋭い洞察には頭が下がった。私にとっての当面の課題は、晩年の国吉の作品をもう少し詳しく調べることである。7月に新装開館となる「スミソニアン・アメリカ美術館」などに所蔵される晩年の作品を、ぜひ見たいと思う。国吉の魅力を探る旅は、これからも国境を越えて続いて行く。このよろこびを、できるだけ多くの人と分かち合っていきたいと思う。

最後になりましたが、この展覧会の開催にあたり、お世話になりましたすべての方々、そして展覧会に足をお運び下さいました来館者の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

（学芸員 廣瀬就久）



国吉康雄展 展示風景